

【研究ノート】

ウイルタの歌謡：言語と音楽の記録4例

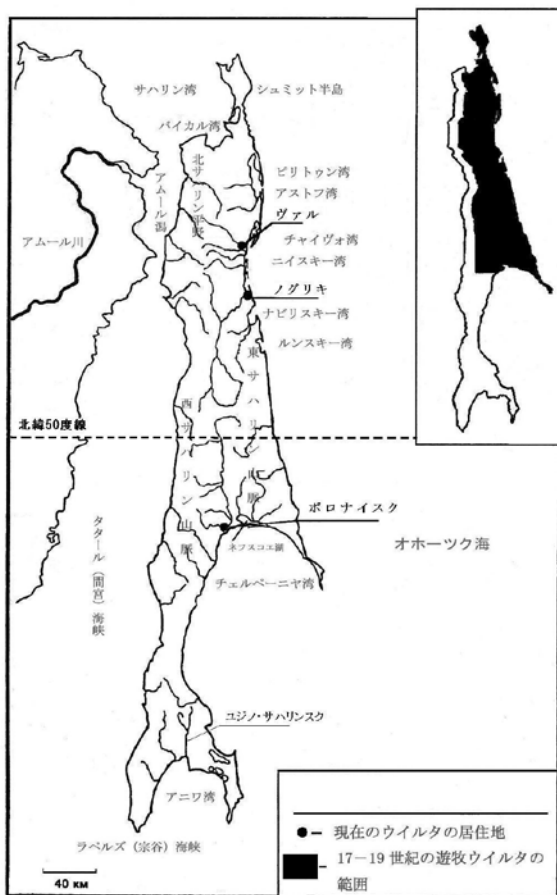
山田祥子・荒山千恵

0. はじめに

ウイルタ(旧称：オロッコ)は、おもにサハリン島の中部から北部にかけての地域に居住する民族である。その固有の言語であるウイルタ語は系統的にツングース諸語の一つに分類される。ウイルタ語の方言は、ほぼ北緯50度を境として、サハリン北部のヴァルValを中心とする地方で話される「北方言」と、サハリン中部のポロナイスクPoronaisk(かつての敷香)を中心とする地方で話される「南方言」の二つに分かれる(池上 2002: i; 図1も参照)。このうち南方言の話し手である南のウイルタは20世紀前半に日本領樺太の統治を経験し、戦後にはその一部の世帯が北海道に移住した。これまで日本におけるウイルタ研究は、そうした南のウイルタを対象とした調査にその大部分を依拠してきた。日本の研究者による北のウイルタに対する調査が始まったのは、ソ連崩壊後1990年代に入ってからのことである。

本稿は、ごく近年に北のウイルタから採録した歌謡4例の録音データを、言語的情報と音楽的特徴を一覧できる記録資料として提示することを主目的とする。広くさまざまな研究分野で

図1：ウイルタの居住域(ローン 2005；一部改変)



理解できるよう、汎用性の高い一定の基準にもとづく規範的な示し方を優先し、歌詞については池上(1997)によるローマ字式音韻表記を用いて山田が、音楽については五線記譜法を用いて荒山が記録を行う。構成として、ウイルタの歌謡についての先行研究を第1節に、本稿の用いる基準や方針等の詳細を第2章に、そして歌謡4例の記録を第3章にまとめる。

このように規範的な立場をとる一方で、書かれる習慣のなかった現象を整理し視覚化する作業には相当程度の記述的な分析を要する。このことは、金城(1989: 111)が「採譜にあたって最も大切なことは、その文化自身の意識を踏まえうえで、客観的厳密さと現象の整理、すなわち記述的要素と規範的要素との綱引きのなかに、自らの研究視点を位置づけていくことだ」と述べているとおりである。そこで本稿では、作業の過程において行った分析や現段階での記述的考察を筆者両名で意見交換しながらまとめ、第3章の註および第4章に補足する。

1. 先行研究

1.1 池上・谷本（1974）

ウイлтаの歌謡についての研究は、池上・谷本（1974）に代表される。これは南のウイлта出身の女性から採録した歌謡4例を五線譜付で記録し、韻律的分析および音楽的分析を加えたものである。

池上・谷本（1974）の複合的なアプローチにより、少なくともそこに採録された歌謡4例では、一定の折返し句のもつ音楽上の長短リズムを基本とした行（line）が韻律的単位として認められることが明らかとなった。歌詞のうえで折返し句の音節数を基本に行を規定することもできるが、折返し句以外の行では折返し句の長短リズムに合わせて歌詞の音節を延ばしたり縮めたりしている（*ibid.*: 9）。また、歌詞に頭韻が認められることがある（*ibid.*: 10）が、すべての歌謡に必須ではないようである。こうしたことから、「歌詞は音楽からその長短リズムが与えられ、音楽上の長短リズムがいわば韻律の代役を果たしている」（*ibid.*: 9）と指摘されている。

また、歌詞のウイлта語について、通常の話しことばでは見られない特徴がいくつか挙げられた。すなわち、話しことばにない音結合や語彙が見られること、修辭的に同型の表現の繰り返しが多いこと、比喩（隠喩）が多いことなどである（池上・谷本 1974: 11）。

シベリア諸民族の音楽における比較研究に向けた視点が加えられたことも注目すべきである。たとえば、ニヴフ（原著では旧称で「ギリヤーク」）とウイлтаの三音旋律では、開始音が固定的で一番上の音に来るといった共通の傾向があるという（池上・谷本 1974: 14；谷本 1969も参照）。比較研究においては、音組織のうえでの開始音と終止音の（片方だけではなく）組み合わせを目安として、より多くの資料を確かめることが必要であると強調された（池上・谷本 1974: 15）。

池上・谷本（1974）は、本稿筆者両名に執筆の動機と方向付けを与えたと同時に、この分野における研究の将来的なかたちとして向かうべきところを指し示した。上述のように本稿は記録の提示を主目的とするが、将来的にはこれが池上・谷本（1974）のような専門的かつ複合的な分析や比較研究に一つの資料として活かされることを期待する。

1.2 ウイлтаの歌謡の記録資料とジャンル分類

南のウイлтаの歌謡の記録として、池上編（1982: 41-43）に掲載される川村秀弥氏によるノート、および池上（2002）『増訂ウイлта口頭文芸原文集』（音声CD付）が挙げられる。前節に挙げた池上・谷本（1974）で扱われた4例は、池上（2002）に再掲されている。

池上（2002: i）によると、南のウイлтаの歌謡には「ハーガ（xæga）」と呼ばれるジャンルが認められる。これは、元来の即興歌がその場限りで消えずに伝承されてきたもので、gænnəngækka gænnənnæという折返し句の現れるものをいう（池上 2002: i）。このハーガの他に、子どものための歌として「童謡」というジャンル（子もり歌を含む）も立てられる（*ibid.*）。このジャンル分類にもとづけば、上述の池上編（1982: 41-43）にはハーガ3例、池上（2002）にはハーガ4例、童謡2例が掲載されているといえることができる。

一方、北のウイлтаについては、池上（2002）に歌謡11例が載る。これは1990～92年にサハリンで採録されたデータにもとづくものである。

ただし、池上（2002）はこれらの歌謡について積極的なジャンル分類を行わず、歌詞の内容から判断したタイトル（「叙情歌」など）を掲げるのみである。筆者（山田）が近年サハリンで行っている北のウイлтаに対する調査では、歌謡全般を指してjaaja「歌（歌謡）」と呼ん

でいるのを耳にする。後掲の図2 (Ikegami et al. 2008: 65) でも、歌謡はjaaja (図中の表記では Jāja) と呼ばれている。北のウイлтаで元来歌謡のジャンル区分をしなかったのか、それとも北でも南でも最近になってそれを失ったのかどうかは明らかではない。いずれにしても、北のウイлтаの歌謡についてジャンルを追究することは、今後さらなる調査を経た後の研究成果に期待したい。したがって、以下に掲げる4例でもジャンルを分けず、ウイлтаの人々自身による呼び名であるjaajaにもとづいて、すべてを「歌謡」と呼んでおく。

2. データの概要と執筆方針

2.1 採録データの概要

本稿に掲げる歌謡4例の記録はすべて、2007年と2008年にユジノ・サハリンスクにおいて津曲敏郎氏(北海道大学文学研究科教授)がウイлта語北方言の伝承者である Elena Alekseevna Bibikova氏(1940年ノグリキ Nogliki 近郊のダギ Dagi 近くに生まれ、2009年9月現在ノグリキ Nogliki 在住)による口唱を採録した音声データにもとづく。なお、2008年の採録の際は山田も同席した。第3章では各データの採録年月日を各節の冒頭に示し、その古い順に掲載する。

2.2 採譜の方針

音楽については、絶対音感を基調にした五線記譜法により荒山が採譜を行った。その際にはまず、上記の音声データから聴き取った旋律を手書きで採譜したものを、楽譜作成ソフトウェア「finale: PrintMusic 2009 アカデミック版」を用いて譜面に書き起こした。

本稿の紙面上では1回目に歌われる大楽節を示し、繰り返しには反復記号を用いた。ただし、実際に繰り返し歌われる旋律の多くは全く同じものではなく、部分的に変化する。紙面の都合もあり、それらをすべて紹介することはできないが、一例として歌謡4(3.4)の譜面で、3回目に繰り返される大楽節も示したので参照されたい。各歌謡の旋律に関する特色は3章各節の【註2】に記した。なお、ここでは旋律を構成する音をドイツ名により表記しているが、これは絶対音感による音名ではなく、各歌謡の旋律に用いられる音の構成を比較可能にするために、階名唱法にもとづき相対音感による階名に置き換え、すべての主音をCに設定のうえ表記したものである。拍子については、リズムや息遣いをもとに決定した。

2.3 歌詞テキストの表記と訳付けの方針

ウイлта語の歌詞テキストについては、もとなる音声データと口唱者E. A. Bibikova氏がロシア字で歌詞を書いたメモを参考にしつつ、山田が表記を行った。

音韻表記はすべて池上(1997)にしたがい、母音音素 a, ə, ø [ø-ò], o [ɔ], u, i, e、子音音素 p, t, k, b, d, g [g, ɣ], m, n, ŋ, l, r, s, x, w, j, č [tʃ], ʃ [dʒ]によって表わし、音節構造は(C)V(V)(C) (C: 子音, V: 母音、括弧内は任意の音素)を基本とする。本稿では、譜面上の音符との対応関係を示すために音節をさらに細かく分けたモーラという単位を認める。これは津曲(1982: 76)、Tsumagari(2009: 3)にもとづき、1モーラは「CV」「(語頭またはVの後の)V」「(Cの前または語末の)C」のいずれかで構成されるものとする。

五線譜の下では、譜面上の一つの音符に対応する1モーラあるいは複数のモーラからなる音節(基本的には1音節だが複数の場合もある)ごとに空白で区切って表示する。その際、話しことばにおける本来の長母音・二重母音は母音音素を二つ重ねて表わし(例: aa, ai)、話しことばの単母音が歌謡において母音を延ばす、あるいは別の母音を挿入する場合は、話しことばにない方の母音を[]で表わす(例: a [a], a [i])。逆に、話しことばにおける長母音(例:

/aa/) が、歌ううえで短縮されて単母音（例：/a/）に聞こえる場合は、二つ目の母音音素をイタリックで表わす（例：aa）。

逐語訳の部分のウイルタ語は、通常の話しことばにおける発音によって表記する。ここでは、ウイルタ語の単語ごとに空白で区切り、そのすぐ下に日本語逐語訳を示す。日本語逐語訳は、特記しない限り、池上（1997）、Ozolinja（2001）による辞書を参考に作成したものである。

ウイルタ語の語順は基本的に日本語のそれと似ており、逐語訳だけでも日本語として意味の通じる場合が多い（Tsumagari 2009: 11-12も参照）。そのため、原則として意識を省略するが、逐語訳だけでは日本語として意味の通じない場合（否定構文など）のみ、[] 内に補足することとする。

3. ウイルタの歌謡4例

3.0 概要

以下 3.1～3.4 で、ウイルタの歌謡 4 例を掲げる。各節タイトルには、歌謡の通し番号（例：歌謡 1）、タイトル、もととなる音声データの採録年月日を記す。なお、タイトルは歌手によるものではなく、筆者（山田）が歌詞の内容にもとづいて付す便宜的なものであることをあらかじめ断っておく。

各節の構成は以下のとおりである。まず、楽譜とそれに対応するかたちでウイルタ語の歌詞を表記する。続いて、歌詞のウイルタ語テキストの日本語逐語訳を記す。ここに振る行番号は楽譜下の歌詞の番号と対応する。最後に、採録データについて【註 1】、音楽について【註 2】、および歌詞について【註 3】を順に補足する。なお、【註 3】で池上（1997）以外の辞書から引用する場合は、池上（1997）にもとづく音韻表記に改める。露文からの引用では、山田による和訳を記す。

3.1 歌謡 1：ベリー摘みのうた（2007 年 10 月 13 日採録）



(1)	xæi	nə	nə	næi	nə	nə	nə	ə	[ə]	xæi	nə	nə	næi	nə	nə	næə
(2)	xoot	to	i	ŋən	nee	su	gə	[ə]	[ə]	xoot	to	i	ŋən	nee	su	gə
(3)	bai	sa	i	dau	ri	[i]	po	o	[o]	bai	sa	i	dau	ri	[i]	poo
(4)	xai	wa	[a]	gan	ni	su	gə	[ə]	[ə]	xai	wa	[a]	ga	ni	su	gə
(5)	sədu	xim	bə	gatan	ni	[i]	po	o	[o]	sədu	ximbə	gatan	ni	[i]	poo	
(6)	mim	beeddə	orog	du	[u]	so	o	[o]	mim	beeddə	orog	du	[u]	soo		
(7)	sim	be	e	əji	li	pu	o	rog	do	sim	be	e	əji	li	pu	o rog do
(8)	xai	mi	[i]	əji	li	su	o	rog	do	xai	mi	[i]	əji	li	su	o rog do
(9)	ug	da	pu	dalup	tu	xa	ne	e	[e]	ug	da	pu	dalup	tu	xa	nee
(10)	ulij	ga	ji	ŋən	nə	u	sə	ə	[ə]	ulij	ga	ji	ŋən	nə	u	səə
(11)	xæi	nə	nə	næi	nə	nə	nə	ə	[ə]	xæi	nə	nə	næi	nə	nə	næə

【逐語訳】

(1) xəinənə	nəinənənə [*1]	(×3 回)
ハイナナ	ナイナナナー	
(2) xoottoi	ŋənneesugə	(×3 回)
「どこへ	行くの？」	
(3) baisai	dauripoo	(×3 回)
「向こう岸へ	渡るんだ」	
(4) xaiwa	gannisugə	(×3 回)
「何を	採りに行くの？」	
(5) səduximbə	gatannipoo	(×3 回)
「ベリーを	採りに行くんだ」	
(6) mimbeedda	orogdusoo	(×3 回)
「おれも	連れて行けよ」	
(7) simbee	əjlipu orogdo	(×3 回)
「お前を	しない 連れて行くこと [お前は連れて行かないよ]	
(8) xaimi	əjlisu orogdo	(×3 回)
「どうして	しない 連れて行くこと [どうして連れて行かない?]	
(9) ugdapu	daluptuxanee	(×3 回)
「おれたちの舟が	一杯なんだよ」	
(10) uliŋgəjī	ŋənnəuseə	(×3 回)
「良く	行けよ [気をつけて行けよ]	
(11) xəinənə	nəinənənə [*1]	(×3 回)
ハイナナ	ナイナナナー	

【註 1】 これと同一の歌は、2009 年 6 月 2 日に北海道大学で行われたコンサート「講演と唄の夕べ：サハリン先住民言語を伝え、残す」において、E. A. Bibikova 氏と Irina Jakovlevna Fedjaeva 氏（1940 年ヴァル Val 生まれ）が公演した（本誌の講演会等報告も参照）。その他にも、この歌はさまざまなかたちで公開・記録されている。まず、歌詞については池上（2002: 127）、Ikegami et al.（2008: 65；図 2）に掲載されている。音声については、池上（2002）の付録 CD で公開されているほか、本稿掲載の元となった音声データ、および筆者（山田）が 2008 年 9 月にヴァル Val 村にて採録した音声（未公開）、さらには上述のコンサートで録画した映像（未公開）も残っている。

しかし、以上に挙げたデータは、それぞれ歌い手や歌い方（人数や演出のしかた）などが異なるだけでなく、旋律や歌詞そのものにも少なからぬ差異が見られる。池上（2002: 127）では、Anna Vasil'evna Semenova 氏（1919-1992；ナビリ Nabil'出身、上述の I. Ja. Fedjaeva 氏の母親）の口唱による音声資料が訳注とともに載っているが、旋律や歌詞の一部が異なる。Ikegami et al.（2008: 65；図 2）では、ウイльта語文字教本のテキストとして北方言（略号で(c)）と南方言（略号で(ю)）の歌詞を併記している。

また、この歌謡は図 2 の挿絵が描くような川岸での対話を情景としたもので、(2)～(10)が対話形式になっている。この記録および池上（2002）では一人の歌い手が単独ですべてを歌ったが、上述の他の記録では歌い手が複数おり、うち一人が(2)(4)(6)(8)(10)を、残りの一人ある

いは複数人が(3)(5)(7)(9)を、(1)(11)を全員で歌うという形式で演じられた。

さらに、ウイлтаの近隣諸民族にもこれと類似する歌謡があることがわかっている。たとえば、サハリンおよびアムール下流域に居住する先住民族であるニヴフでは、旋律や歌詞の内容がウイлтаのそれとほぼ同一の歌謡を白石・ローク（2003: 73-75, 111；同書付属CDも確認）が記録している。

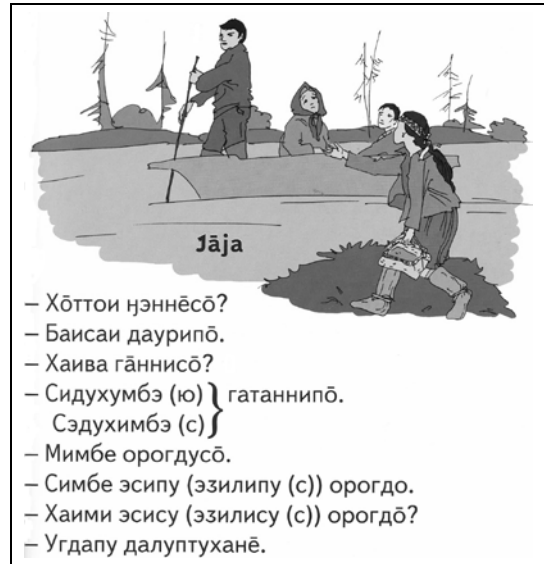
【註2】 旋律はCDEGAHの6音により構成され、終始2拍子による安定した速度で歌われる。リピートを含む上記6小節を大楽節とし、これを繰り返す。繰り返し歌われる際、旋律は部分的に変化する。

【註3】

[*1] (1)(11)の歌詞は、池上・谷本（1974）、池上（2002）が、ハーガの特徴とする折返し句 *gənnəŋgəkkə gəənənnə* に対応すると考えられる。なお、*nəinənənə* の最後の母音を本来の長母音 *ə* と見るべきか、歌謡における母音の延長 *a[a]* と見るべきかは明らかではないが、本稿では池上・谷本（1974）にしたがい長母音 *ə* として表記している。

図2：文字教本に見る歌謡1の情景とテキスト

(Ikegami et al. 2008: 65 より転載)



3.2 歌謡2：チュミルタカーヌの歌（2007年10月13日採録）



 (0) gəə gəŋ gəə gəə gə ŋ gəə gəə gəŋ gəə gəə gəŋ gəə



 (1) təə məi u ni daa du nee to ri gasa ni bič či ne e
 (2) ta ri to ri gasa du nee čumil ta kaa nu bič či ne e
 (3) čumil ta kaa nu na ri nee a [a] si lu bič či ne e
 (4) čumil ta kaa nu na ri nee ba ju na ri bič či ne e
 (5) čumil ta kaa nu a si nee noot toi sor ri bič či ne e
 (7) čumil ta kaa nu ba ja nee pumik təə dəp tumi bal ji xa [a]



 (8) gəə gəŋ gəə gəə gəŋ gəə gəə gəŋ gəə gəə gəŋ gəə



(6) čumil ta kaa nu a si nee u [u]m buk ki bič čine e

【逐語訳】

- | | | | | | |
|-----|--------------|-----------|-----------------------|------------|----------|
| (0) | gəəgəŋgəə | gəəgəŋgəə | gəəgəŋgəə | gəəgəŋgəə | |
| | ガーガンガー | ガーガンガー | ガーガンガー | ガーガンガー[*1] | |
| (1) | təəmæi | uni | daadunee tori | gasani | biččinee |
| | トゥイミ[*2] | 川の | 河口にね トリサ (族の) | 部落が | あったよ |
| (2) | tari tori | | gasaduneečumiltakaanu | | biččinee |
| | その トリサ (族の) | | 部落にね チュミルタカーヌ (という人が) | | いたよ |
| (3) | čumiltakaanu | narinee | asilu | | biččinee |
| | チュミルタカーヌ | その人ね | 妻持ち | | だったよ |
| (4) | čumiltakaanu | narinee | baju | nari | biččinee |
| | チュミルタカーヌ | その人ね | 怠け者の | 人 | だったよ |
| (5) | čumiltakaanu | asinee | noottoi sorri | | biččinee |
| | チュミルタカーヌ | その妻はね | 彼と けんかして | | いたよ |
| (6) | čumiltakaanu | asinee | umbukki | | biččinee |
| | チュミルタカーヌ | その妻はね | いつも言っ | | いたんだよ |
| (7) | čumiltakaanu | bajanee | pumiktəə dəptumi | baljixa | |
| | 「チュミルタカーヌ | その金持ちは、 | 羽虫を 食べて | 育ったのさ」 | |
| (8) | gəəgəŋgəə | gəəgəŋgəə | gəəgəŋgəə | gəəgəŋgəə | |
| | ガーガンガー | ガーガンガー | ガーガンガー | ガーガンガー[*1] | |

【註1】 この歌は、歌手である E A. Bibikova 氏が 1991 年に Mixeeva Marija Stepanovna 氏 (1910-1995 ; トゥイミ Tym'河口近くの生まれ) が歌ったのを聞いて覚えたものだという。

【註2】 主題となる旋律は CDEG の 4 音により構成され、終始 2 拍子による安定した速度で歌われる。5 小節目から 12 小節目までの 8 小節を大楽節とし、繰り返すにより旋律は部分的に変化する。大楽節の後半である 9 小節目から 12 小節目は折返し句である gəəgəŋgəə に該当し、曲の最後にも折返し句が歌われる。また、最初の 4 小節も折返し句が前唱的に歌われているが、最初の 2 小節には主題となる旋律には用いられない Es と F の音が含まれる。

【註3】

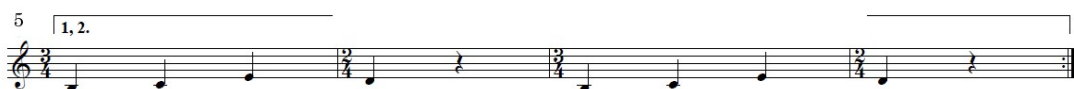
[*1] (0)(8)の歌詞は、池上・谷本 (1974)、池上 (2002) が、ハーガの特徴とする折返し句 gənnəŋgəkka gəənənnəə に対応すると考えられる。なお、gəəgəŋgəə の最後の母音を本来の長母音 əə と見るべきか、歌謡における母音の延長 ə[a] と見るべきかは明らかではないが、本稿では池上・谷本 (1974) にしたがって長母音 əə として表記している。

[*2] トゥイミ Tym' はサハリン島中部を源流とし東海岸でオホーツク海に注ぐ河川で、現在河口にはノグリキ Nogliki (ウイльта名 : Naxulakka) がある (図 1 も参照)。

3.3 歌謡 3：お祭りの歌（2008 年 4 月 15 日採録）



- (1) nə lu təj ʃi an du čim bi i [i]r ga ʃi ir ga xam bi
 (3) gi læp tuj ʃi an du čim bi ni [i] xa ʃi ir ga xam bi
 (5) gi læp tu bi tə tu xəm bi nə lu tə bi tə tu xəm bi



- (2) u liŋ ga joo u liŋ ga joo
 (4) u liŋ ga joo u liŋ ga joo



- (6)(6.1) ə si jaj jee wi (7) u liŋ ga joo
 (6.2) məur ree məur ree wi

【逐語訳】

- | | | | |
|---------------|-----------|---------------|----------------|
| (1) nəlutəjʃi | andučimbi | irgaʃi | irgaxambi |
| 自分の胸当てとして[*1] | 作った | 刺繍で | 模様をつけた |
| (2) uliŋgajoo | uliŋgajoo | | |
| きれいでしょ | きれいでしょ | | |
| (3) giləptuʃi | andučimbi | nixaʃi | irgaxambi |
| 自分の袖当てとして[*3] | 作った | ビーズで[*2] | 模様をつけた |
| (4) uliŋgajoo | uliŋgajoo | | |
| きれいでしょ | きれいでしょ | | |
| (5) giləptubi | tətuxəmbi | nəlutəbi | tətuxəmbi |
| 自分の袖当てを[*3] | 着けた | 自分の胸当てを[*1] | 着けた |
| (6) (6.1) əsi | jajjeewi | (6.2) məurree | məurreewi [*4] |
| 今 | 歌う | 踊りを | 踊る |
| (7) uliŋgajoo | uliŋgajoo | | |
| きれいでしょ | きれいでしょ | | |

【註 1】 この歌は、2008 年 4 月 14 日にユジノ・サハリンスク市内で開催されたウイльта語文字教本 (Ikegami et al. 2008) の出版記念式典でも公演された。また、2008 年 9 月に筆者 (山田) がヴァル Val 村で E. A. Bibikova 氏と I. Ja. Fedjaeva 氏の合唱を録音したデータ (未公開) も残っているが、本稿のデータとは旋律や歌詞に異なる部分がある。

【註 2】 旋律は D E F G A の 5 音により構成される。1 小節目から 8 小節目を大楽節とし、3 回繰り返される。拍子は、大楽節の前半 4 小節を 2 拍子、後半 4 小節に該当する歌詞 uliŋgajoo 「きれいでしょ」を 3 拍子+2 拍子により歌う。3 回目に歌われる旋律は 12 小節か

ら成り、前半4小節の後に旋律が加えられ(9~10小節目)、後半4小節(11~12小節目)へと続いて歌は終わる。大楽節の前半4小節の旋律は、繰り返しにより部分的に変化する。

【註3】

[*1] *nəluta* 「胸当て」という訳は、E. A. Bibikova 氏の説明にもとづく。北方言による語彙を豊富に載せた Ozolinja (2001: 219) および Ozolinja & Fedjaeva (2003: 106) にある語彙 *nolu ~ nəlu* 「前掛け、(女性用) 胸当て」と同じものを指していると思われる。この用途や特徴については Roon (1996: 138) に「胸当て *nəllu*」として詳述されている。同書によると、これは花嫁の婚礼衣装と葬儀服の一部であるという。一方、南方言で同じ語源に遡ると考えられる語彙には、潤濁 (1981: 142) に *nəluu* 「死人にかける前垂れ」が載る。池上 (1997) に該当する語彙は見当たらない。

[*2] *nixa* 「ビーズ」という訳は、E. A. Bibikova 氏の説明および Ozolinja & Fedjaeva (2003: 196) にもとづく。他の辞書では該当する語彙項目が見つからない。

[*3] *giləptu* 「袖当て」という訳は、Ozolinja (2001: 61)、Ozolinja & Fedjaeva (2003: 32) にもとづく。南方言では、潤濁 (1981: 142) に *geleptu, giləptu* 「腕輪、手首の飾り」、池上 (1997: 70) に *giləptu* 「腕輪 (中国からの渡来物)」が載り、珠玉で作った腕輪のことをいうようである (潤濁 (1981) の巻末写真も参照)。

[*4] *məurreewi* 「(私は) 踊る」の部分は、通常の話しことばなら *məuriwi* という語形となる。ここでは本稿の音声データにおける歌い手の発音にもとづいて表記した。

3.4 歌謡4: ウイルタ語で話そう (2008年4月15日採録)



(1) uil ta na ri sal ni kə [ə]s səə ri [i] wəə də xə pu
 (3) uil ta bi čix xəə ni ba a xa pu [u] ə si lək kə
 (5) uil ta sa [a]l dool ju su kə [ə]s səə ri [i] sa a ru su



(2) or ki ta ri or ki ta [a] ree
 (4) u liŋga ta ri u liŋga ta [a] ree
 (6) əj ʒeesu om go əjʒee su om go



(7.1) uil ta[i] da i ru su u il ta [i] [i] da i ri su



(7.2) u il ta [i] dai ri pu (8) gə a ja

【逐語訳】

(1) uilta	narisalni	kəssəəri	wədəxəpu
ウイлта	その人々	自分たちのことばを	忘れてしまった
(2) orki	tari	orki	taree
悪い	それ	悪い	それ
(3) uilta	bičixxəni	baaxapu	əsiləkkə
ウイлта	その文字を	我々は生んだ	いまや
(4) ulinga	tari	ulinga	taree
良い	それ	良い	それ
(5) uiltasal	doofjusu	kəssəəri	saarusu
ウイлтаたち	聞きなさい	自分たちのことばを知りなさい	
(6) əjjesu	omgo	əjjesu	omgo
するな	忘れること	するな	忘れること
			[忘れるな、忘れるな]
(7) (7.1) uiltadairusu	uiltadairisu	(7.2) uiltadairipu	[*1]
ウイлта語で話せ	ウイлта語で話そう	ウイлта語で話すよ	
(8) gə	aja		
さあ	良い		

【註 1】 この歌は、歌い手である E. A. Bibikova 氏自身の作詞・作曲によるものだという。2008 年 4 月 14 日にユジノ・サハリンスク市内で開催されたウイлта語文字教本 (Ikegami et al. 2008) の出版記念式典において子どもたちの合唱によって披露された。

【註 2】 旋律は CDEG の 4 音により構成され、終始 2 拍子による安定した速度で歌われる。1 小節目から 8 小節目までを大楽節とし、3 回繰り返される。繰り返しの際には、旋律が部分的に変化する。本例はその変化を示すために、3 回目の繰り返しを略さずに記した。1~8 小節目 (1 回目) と 10~17 小節目 (3 回目) に歌われる旋律を比較すると、その変化を確認することができる。

【註 3】

[*1] (7) を歌う際、3 箇所に通常の話しことばでは見られない母音 [i] を挿入する (例: uilta[i]dairusu)。

4. 考察

4.1 音楽について

各歌謡の音楽に関する特徴について、次の点が挙げられる。第一に、本稿に紹介する 4 例は、基本的にはすべて 2 拍子で歌われている。第二に、旋律の開始音について、いずれも主音である C からは始まらず、E もしくは G から始まる。終止音については、歌謡 3 (3.3) のみ G で歌が終わる、ほかの 3 曲は主音である C で終わる。第三に、各歌謡に用いられる音 (階名) を比較すると、C, D, E, G の音を用いて旋律をつくるものが多い (表 1)。また、各小節の旋律は、主和音 (I 度) および属和音 (V 度) の響きを中心に構成されるものが目立つ (歌謡 1, 2, 4)。一方、F の音を用いる旋律は少ない。今回の採譜では F を主題となる旋律に含むものは、歌謡 3 (3.3) のみである。第四に、各歌謡の旋律は大楽節の繰り返しにより歌われる。また、繰り返される毎に旋律が部分的に変化する傾向にある。繰り返しに認められる旋律の部分的変

化はどのように現れるのか。この点は、歌詞と旋律との対応関係を含め、さらに検討が必要である。

表1：各歌謡の旋律に使用される音（階名）の比較一覧

歌謡1	C	D	—	E	—	G	A	H
歌謡2	C	D	(Es)	E	(F)	G	—	—
歌謡3	—	D	—	E	F	G	A	—
歌謡4	C	D	—	E	—	G	—	—

4.2 歌詞について

次にウイльта語の歌詞に見られる特徴について、1.1で概略した池上・谷本（1974）を参考に下記の表2にまとめる。

第一に、折返し句については池上・谷本（1974）の扱ったハーガに典型的な *gənnəŋgəkkə gəənənnəə* という句に類似のものが歌謡1, 2に見られる。この点で、歌謡1, 2については、南のウイльтаのジャンル分類を適用してハーガ (*xəəgə*) と呼びうると考える。第二に、話しことばに見られない特殊な音形や語彙は、歌謡3 (3.3【註3】[*1][*4])、および歌謡4 (3.4【註3】[*1]) に見られる。しかし、これらは方言差などを背景とした記述の欠如によるものかもしれない。第三に、同型表現の繰り返しは、本稿に掲げたすべての歌謡に見られる。これらが池上・谷本（1974）の言及した頭韻や脚韻とどのように関わるかは、今後の検討課題とする。第四に、比喩（隠喩）は、本稿に掲げたいずれの歌謡にも見られない。

また、4例を通じて音節数は変動的であり、歌詞ではなく音楽上の長短リズムが韻律の基準となっているという池上・谷本（1974）の指摘と矛盾しない。たとえば、歌謡1 (3.1) で基本となる折返し句の行(1)(11)は7音節を3回繰り返すが、(2)は6音節を3回、(3)は5音節を3回、と行の音節数は一定しない。また、母音の長短も歌のリズムに合わせて短縮されたり延ばされたりしていることを確認した。

表2：各歌謡のウイльта語歌詞に見られる特徴（池上・谷本（1974）を参考に作表）

	一定の折返し句	特殊な音形／語彙	同型表現の繰り返し	比喩（隠喩）
歌謡1	+	—	+	—
歌謡2	+	—	+	—
歌謡3	—	+	+	—
歌謡4	—	+	+	—

(+：有り、—：無し)

5. おわりに：今後の課題と展望

以上、本稿では北のウイльтаから採録した歌謡4例を、言語・音楽の資料として提示した。本稿の執筆に際し、4例以外にも数例の採譜を行ったが紙幅の都合で割愛した。記録の方法としても初歩的な試みであった本稿を一つの足がかりとして、今後も記録を継続していくことが望ましい。もっとも、言語・音楽の一次資料としては音声あるいは映像データとともに公開することが理想である。今後はウェブなどを通じたデータの公開も視野に入れていきたい。

最後に、本稿をとおして浮かび上がったウイлтаの歌謡の研究における今後の課題を「比較」という観点から2点補足する。

第一に、共時的な比較である。本稿に掲げた4例は特定の一人の歌い手によるものだが、他の記録を見ると、同一の歌謡であっても歌い手や歌う場、さらに方言によって旋律や歌詞が異なる例が見られる。そして、個人や方言による相違の検討のほか、池上・谷本（1967）が方向性を示したシベリア諸民族の音楽との比較もまた、これからの研究に期待されることである。

第二に、通時的な比較である。たとえば、本稿の歌謡1（3.1）と同一と見られる歌謡は池上（2002）によって一世代前の歌い手による口唱も記録されているが、二つの記録では旋律や歌詞が少なからず異なる。同様の例は、本稿が割愛したデータのなかにも2件確認した。こうした相違が歌い手個人によるものなのか、世代による変化の結果なのか、現段階では定かではないが後者の可能性も考慮すべきである。また、歌謡4は歌い手による創作であり、古い伝承歌とは異なる新しい世代の特徴をもつことも考えられる。このように、古い記録との比較によって世代を越えた伝承における歌謡の変化を捉えることも、今後この分野における重要な課題であると考えられる。

謝辞

本研究にあたり、調査への深いご理解をもって数々の歌謡を録音機の前でご披露くださった E. A. Bibikova さんに謝意を表します。また、貴重な音声データをご提供くださった津曲敏郎先生、民族音楽の記述や採譜についての参考資料をご提示くださった甲地利恵さんに、この場を借りて心より感謝申し上げます。なお、本研究の一部は、文部科学省科学技術研究費補助金（基盤(B)；課題番号 18320061 [代表：津曲敏郎]、若手研究(B)；課題番号 21720281 [代表：荒山千恵]、特別研究員奨励費；課題番号 21-2110 [代表：山田祥子]）の助成を受けています。

参考文献

池上二良

1982 『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』（昭和 57 年度ウイлта民俗文化財緊急調査報告書 5）、北海道教育委員会。

1997 『ウイлта語辞典』北海道大学図書刊行会。

2002 『増訂ウイлта口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集 16）文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013、大阪学院大学。

池上二良・谷本一之

1974 「オロッコ族の歌謡」『北方文化研究』8: 1-28、北海道大学文学部北方文化研究施設。

金城 厚

1989 「日本・アジア音楽の採譜と音楽分析」『岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽』7: 103-114、岩波書店。

白石英才・ガリーナ D. ローク（共編）

2003 『ニヴフ語音声資料 2：アムール方言の民話と歌謡』文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-036、大阪学院大学。

谷本一之

1969 「ギリヤーク民謡の音組織について」『創立三十周年記念 日本・東洋音楽論考』61-72、東洋音楽学会。

津曲敏郎

1982 「ウイлта語のアクセント」『アジア・アフリカ文法研究』12: 75-84、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

潤潟久治（編）

1981 『ウイльта語辞典』 網走市北方民俗文化保存協会.

ローン, タチャーナ（著） 永山ゆかり・木村美希（共訳） 津曲敏郎・加藤博文（監訳）

2005 『サハリンのウイльта：18-20 世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』 北海道大学大学院文学研究科 [Roon 1996 の邦訳].

Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva

2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski*. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.

Ozolinja, L. V.

2001 *Oroksko-russkii Slovar': okolo 12000 Slov*. Novosibirsk: Izdatel'stvo SO RAN.

Ozolinja, L. V. & I. Ja. Fedjaeva

2003 *Oroksko-russkii i russko-orokskii slovar'*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.

Roon, T. P.

1996 *Uil'ta saxalina: Istoriko-etnograficheskoe issledovanie traditsionnogo xozhjaistva i material'noi kul'tury XVIII - serediny XX vekov*. Juzhno-Saxalinsk: Saxalinskoe oblastnoe knizhnoe izdatel'stvo/ Saxalinskii oblastnoi kraevedcheskii musei.

Tsumagari, T.

2009 "Grammatical Outline of Uilta (Revised)". In *Journal of the Graduate School of Letters*, Vol.4: 1-21, Sapporo: Hokkaido University.

楽譜作成ソフトウェア

「finale: PrintMusic 2009 アカデミック版」 e frontier.

（やまだ・よしこ／北海道大学大学院文学研究科 博士課程、

あらかやま・ちえ／北海道大学大学院文学研究科 専門研究員）